

平成 22 年 5 月 21 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19720058
 研究課題名（和文） 近代英語演劇におけるステージ・アイリッシュマン表象の
 政治・文化史的研究
 研究課題名（英文） The Political and Cultural History of the Stage-Irishman
 in Modern English Drama
 研究代表者
 岩田 美喜（IWATA MIKI）
 東北大学・大学院文学研究科・准教授
 研究者番号：50361051

研究成果の概要（和文）：

本研究では、英語演劇における〈ステージ・アイリッシュマン〉という紋切り型のアイルランド人表象の系譜（特にアングロ＝アイリッシュ系の劇作家によるもの）を調査・研究した。これにより、本来はイングランド側の視点から差別的にはたらいっていたアイルランド人表象が意味をずらされ、秩序転覆的に機能していたことが分かった。これは、女性表象など他のサブアルタン表象を分析する際のモデルになる可能性がある。

研究成果の概要（英文）：

In this research programme, I examined the cultural and political contexts of the stage-Irishman representations in modern English drama. Focusing especially on those by the Anglo-Irish playwrights including George Farquhar and R. B. Sheridan, I have made clear how they appropriated the stereotype, which originally had ridiculed the Irish people, in order to make it potentially subversive. Their strategy has a possibility as a model to analyse other types of subaltern representations.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	0	1,300,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	540,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：アイルランド、演劇、ステージ・アイリッシュマン、非標準英語

1. 研究開始当初の背景

「演劇空間は政治空間と無関係ではありえない」というのは、オーゲル『権力のイリュージョン』（Stephen Orgel, *The Illusion of*

Power, 1975)や、グリーンブラット、『ルネサンスの自己形成』（Stephen Greenblatt, *Renaissance Self-Fashioning*, 1984）など、1970年代以来のルネサンス演劇研究が重視

してきた点であり、概して従来のステージ・アイリッシュマン研究は、理論的にはこうした新歴史主義的手法をアイルランド側の視点に換骨奪胎したものだった。例えばカイバード (Declan Kiberd) は、演劇史上初のステージ・アイリッシュマンを、シェイクスピアの『ヘンリー五世』 (Shakespeare, *Henry V*) に登場するキャプテン・マクモリスが

‘What ish my nation!’ と詠った英語で叫ぶ瞬間に帰している。イングランド人のナショナリズムを高揚するはたらきを有していた歴史劇において、アイルランド人マクモリスは、そのネガ的表象として笑われ者の役を割り振られているのだ。本研究者は、上記のような研究動向をふまえた上で、主として19世紀後半～20世紀初頭のアイルランド演劇を研究してきた。たとえば、2000年度に提出した博士論文 (東北大学) では、初期のイエイツヤシングが好んで用いたアイルランドの農夫の表象は、ステージ・アイリッシュマンを「高貴なる野人」として積極的な意味を持つ記号に書き直そうとしたブーシコー『ショウラン』 (Dion Boucicault, *The Shaughran*) などの流れを汲んでいることを指摘し、また、ワイルド (Oscar Wilde) の喜劇に登場する人物たちの過激なまでの人工性・非人間性は、人間性よりも獣性を誇張されることの多かった当時のイングランドにおけるアイルランド人表象に対する、暗黙の反逆だと分析した。

こうした研究の背後にあるのは「イングランド人によるアイルランド人表象は歪められており、アイルランド人作家たちは既存の歪曲された像を利用しつつ足下から掘り崩そうとしている」という一枚岩的なステージ・アイリッシュマン解釈である。しかし、本研究者が多様な英語演劇のテキストをあたってみた際には、この〈イングランド／アイルランド〉の二分法が通用しないアイルランド人表象も数多く見られ、そのような場合にはむしろ、ホミ・バーバが『文化の場所』 (Homi K. Bhabha, *The Location of Culture*, 1994) で主張する「混血性」 (hybridity) の概念などを取り入れてゆく必要があるように思われた。例えば、シェリダンの『恋敵』 (R. B. Sheridan, *The Rivals*) に登場するサー・オトリガーは、「乱暴な所作と非論理的発話」というステージ・アイリッシュマンの二大特徴のうち、後者を完全に抜き去られ、その一方では王政復古喜劇における洒落者や田舎紳士といったイングランド産の三枚目の特徴を備えた、雑種性のキャラクターになっているのである。

そこで本研究では、この領域における従来の研究からは等閑視されることの多かった、「ステージ・アイリッシュマンの混血性」を重視しつつ、18世紀から現代にいたる文献・映像テキストを扱うことで、英語演劇におけ

るアイルランド人表象を点で捉えるのではなく、異化と同化のベクトルがせめぎ合うダイナミズムとして提示する。それは、アイルランド人表象のみならず、広く演劇における〈他者〉表象を分析する際の知の枠組みに、新たなモデルを加えられるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究においては、文献、映像、実際の上演などの資料を多面的に渉猟しながら、(1) これまでは等閑視されてきた作品も含め、ステージ・アイリッシュマンを取り扱った英語演劇の18世紀～現代にいたる系譜をの全体像を描く、(2) これらの作品群におけるステージ・アイリッシュマン表象を、単一的解釈から解放し、それらの中にある同化傾向と異化傾向の共存や、イメージのぶれ等を掬い上げる。その際には、個々の作品の成立年代、作者の宗教や出身地、政治的立場などの背景的差異を考慮する、(3) その上で、英語演劇におけるアイルランド人像を点ではなく、さまざまな政治・文化的コンテクストの中で変容しつつける線的な表象として提示し、演劇における他者表象を分析するための新たな理論を構築する、の3点に渡って、段階的に明らかにしてゆくことを目的とした。

3. 研究の方法

本研究の方法としては、個人研究としては広範囲な文献や映像を中心とした資料を渉猟し、それに対して比較文化的なアプローチから研究を遂行した。その具体的な特徴を具体的にのべれば、以下ようになる。

【間テキスト性の重視】本研究は、間テキスト性 (intertextuality) を重要視した。これは、従来のステージ・アイリッシュマン研究が対象にしてきた、他の演劇作品やその受容に関するテキスト、アイルランド人に関する政治・文化的資料などに止まるものではない。例えば、18世紀イングランドにおける文明化推進運動の一環として数多く出版された標準英語教育書などは、言語を〈正統〉と〈非正統〉に分離しようとしている点で、演劇の言語とは本来的に対立するものである。英語発達史の問題を視野に入れることで、舞台上で誇張されたアイルランド訛りを使うステージ・アイリッシュマンの表象分析を深化させることが可能になった。

【混血性の重視】多様なテキストを扱うことは、必然的に多様なアイルランド人のイメージを探求することにつながる。本研究では、「イングランド人との差異」のイメージに焦点をあてることの多い従来の研究とは異なり、その〈アイリッシュネス〉を周囲の文脈に溶け込ませ、同化させようとする型のステー

ジ・アイリッシュマン表象にも光を当てた。トマス・シェリダン『勇敢なアイルランド人』(Thomas Sheridan, *The Brave Irishman*)は、数多くの異本が存在する18世紀の笑劇だが、初期の版では、主人公が誇張されたアイルランド訛りを用いて、ロンドン社会における自らの個性と孤立を声高に主張している。だが、後期の版における彼の訛りや仕草はざっとイングランド風であり、明らかな同化傾向が見られると同時に、実際は特権的な〈イングリッシュネス〉という概念自体を脱構築しようとしている。このように、混血性の概念を導入することで、イングランドへの同化傾向を否定的に解釈しがちであったアイルランド表象研究に、本研究が新たな視点を投げかけることが期待される。

【力学的な表象文化論】また、ステージ・アイリッシュマン表象の重層性を探求する本研究は、こうした重層の意味を静的なものではなく力学的なものとしてとらえることを目的としている。18世紀に一見文明化されたアイルランド人表象が19世紀のロマン派の時代に〈高貴なる野人〉として新たに蘇るさまを現代まで丹念に追って行くことで、例えばマクドナ『イニシュモアの中尉』(Martin McDonagh, *The Lieutenant of Inishmore*, 2001)のような現代の作品をステージ・アイリッシュマン劇の文脈で新たに解釈する可能性が広がることとなった。また、こうしたアプローチによって、直接的なアイルランド人表象のみならず、女性表象のような他のサバルタン表象を分析する際の新たな知のモデルを提供する可能性も広がった。

4. 研究成果

研究計画の初年度には、「17世紀以来の英語演劇のコンヴェンションの一つ〈ステージ・アイリッシュマン〉を網羅的に分析し、近代イングランドにおいてこの記号的なアイルランド人表象が有していた政治・文化的な意味の重層性を明らかにする」という本研究の目的に適う資料の収集を中心に、研究活動を行い、ステージ・アイリッシュマンを取り扱った英語演劇の18世紀～現代にいたる系譜のアウトラインを作成した。

また同時に、初年度よりこまめな成果発表を心がけ、二度の学会発表を行うとともに、本研究が編者の一人を務めた研究論文集の中で、「一八世紀の英国演劇におけるアイルランド人表象」というタイトルの論文を発表した。

当該論文では英国演劇と人種・言語の問題を議論の中心に据え、一八世紀英国の英語改革運動とそれに伴う「標準英語」確立の動きを分析した。こうした運動は必然的に、標準英語を喋れない者を「文明化された社会」から疎外するはたらきを持っていたが、「ステ

ージ・アイリッシュマン」をその一例と位置づけた上で、こうした記号が差別主義的な英国人作家の筆によってのみ産出された訳ではなく、トマス・シェリダンら、アイルランド人作家自身も、ステージ・アイリッシュマンを自らの芝居に登場させていることを、本研究者は指摘した。

次年度には、引き続き資料の調査・研究を行うとともに、初年度に得られた知見を成果として発表することにも力を入れた。この具体的な例としては、2008年4月に投稿した論文『Records and Recollections in *Krapp's Last Tape*』や、2008年9月7日に日本イェイツ協会で行ったイェイツの戯曲に関する学会発表が挙げられる。こうした成果発表では、20世紀のアイルランド演劇において、伝統的な〈アイリッシュネス〉の表象がどのように継承されているかが考察されている。

また、当該年度の後半には「シェイクスピア以来、イングランド人によって作られた〈ステージ・アイリッシュマン〉という概念表象に対し、18世紀アングロ・アイリッシュ系の演劇人はどのような態度を示したのか」という、本研究の根幹的な問題の考察に入った。この成果の一端は、2008年11月24日に東北英文学会で行われた研究発表および、2009年3月発行の論文、『*The Stage-Irishman's Stratagem: George Farquhar and the Emergence of the Smock Alley School*』である。前掲論文において、本研究者はまず、ステージ・アイリッシュマン表象とは、英国コロニアリズムの落とし子であることを確認し、王政復古期にはその内在的転覆性が消去され、無害な笑われ者と変化してゆくことを指摘した上で、ジョージ・ファーカーの戯曲に登場するアイルランド人たちの特徴を論じた。そこに描かれるアイルランド人たちは皆放浪者であり、彼は自らの作品を通じて、アイルランド人の持つ転覆性を復活させるとともに、現実のアイルランド人が置かれていた不安定な立場を表現していたのである。本研究者は17世紀から18世紀前半までのステージ・アイリッシュマン表象の政治・文化的な変遷を追うことで、これまで個別にしか研究されていなかったハワードやファーカーの作品に通底する大きな流れを探り当てたといえるだろう。

最終年度には、これまでのステージ・アイリッシュマン表象に対する分析を整理するとともに、これにより得た知見を、より大きな文脈でとらえ直すことを試みた。後者の具体的な例としては、2009年9月に発表された論文『*The Lady's Tragedy*の家政学』などが挙げられる。この論文において本研究者は、演

劇におけるステレオタイプ表象の問題を〈女性〉の表象へと発展させ、Thomas Middleton, *The Lady's Tragedy* (1611)の新しい解釈を模索した。*The Lady's Tragedy*における女性表象は、William Shakespeare, *The Winter's Tale* (1610)を模しているようでありながら、実はヒロインを徹底した〈他者〉として描き出しているようで対照的である。この点で、Middletonの女性表象は、本研究者が前年度発表した論文“The Stage-Irishman's Stratagem”で論じたGeorge Farquharの劇作品におけるステージ・アイリッシュマンに通底する要素を持っている。Farquharもまた、アイルランド人という〈他者〉を馴致する意図を持った一般的なステージ・アイリッシュマン表象を転覆させ、その他者性を逆照射したからである。

なお、女性のステレオタイプの表象の問題は、2009年10月に筑波大学で開催された日本シェイクスピア協会での口頭発表「『スペインの悲劇』における女性表象と〈終わり〉の感覚」でも考察なされており、本研究者の今後の研究発展の連続性と方向性を示すものとなっている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

1. 岩田美喜、「*The Lady's Tragedy*の家政学」、*Shakespeare News*, 査読有、49巻1号、2009、9-17
2. Iwata, Miki, “The Stage-Irishman's Stratagem: George Farquhar and the Emergence of the Smock Alley School,” *Studies in English Literature*, 査読有、vol. 50, 2009, 25-43
3. Iwata, Miki, “Records and Recollections in *Krapp's Last Tape*,” *Journal of Irish Studies*, 査読有、vol. 23, 2008, 34-43
4. 岩田美喜、「ミッシング・リンクとしてのメロドラマ—ロマン主義時代の演劇」、『英語青年、』査読有、153巻4号、2007、17-19

[学会発表] (計6件)

1. 岩田美喜、「『スペインの悲劇』における女性表象と〈終わり〉の感覚」、日本シェイクスピア協会、2009年10月3日、筑波大学
2. 岩田美喜、「『西国の伊達男』における語りの喜び」(シンポジウム第一部門「コモン・リーダーは復権できるか」)、日本英文学会、2009年5月30日、東京大学
3. 岩田美喜、「フランス帰りのティーン—18世紀演劇におけるステージ・アイリッシュマン表象」、東北英文学会、2008年11月24日、

東北学院大学

4. 岩田美喜、「*The Unicorn from the Stars*をめぐって」、日本イェイツ協会、2008年9月7日、青山学院大学
5. IWATA Miki、Records and Recollections in *Krapp's Last Tape*,” IASIL Japan, 2007年10月27日、神戸親和女子大学
6. 岩田美喜、「幻想のカントリー・ジェントルマン」日本シェイクスピア協会、2007年10月7日、早稲田大学

[図書] (計1件)

1. 岩田美喜・竹内拓史 (共編)、東北大学出版会、『ポストコロニアル批評の諸相』、2008、45-76 ページ

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩田 美喜 (IWATA MIKI)

東北大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：50361051

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

